

Okamoto Taro, Pablo Picasso  
and Carlo Parlati

# **Synchronicity**



## 「芸術は、爆発だ！」

再び、日本で万博が開催されるかもしれない。前回の1970年の大阪万博でその会場にインパクト与えた岡本太郎 作の「太陽の塔」も再生され、改めてその芸術思想の高さが報道されている。しかし、岡本太郎の創作概念は、自分という人間の全存在、生命それ自体を完全燃焼させる表現方法なのだと言う。これは、創作だけに限定したことなく、生き方全てにおいて、自身を生かすか殺すかというギリギリの意識で人生を歩んだと言われる。

正しく「芸術は、爆発だ！」なのである。

彼はまた、フランス留学時代に初めてピカソの抽象化された静物画を目のあたりに涙したと言う。それは作風やインパクトというのではなく、作品から芸術家の精神がビリビリと伝わってくる感覚だったからと言う。彼らしいエピソードであるが、作品の魂を読み取る鋭い感受性とストイックなイメージは、逆に岡本太郎が繊細でプリミティブな感覚の持ち主であるからこそだったのかもしれない。だからこそ今でも彼の作品には生き様が迸るのである。



## 「破壊・創造」

パブロ・ピカソとも親交があった岡本太郎は、やがてピカソの創作概念を追い越すことに挑むのである。そんな立体派の概念を突き詰め猛進していたピカソの創作は、よく「破壊と創造」と例えられるのだが、彼によれば、「撃ち壊す＝否定」することではなく、壊すまでの動作、時間の計画、成果は「確かな現実」であり、その「確かな現実」は、後のどこかで生かされると言う考え方、決して「無」にすることや「否定」ではないらしい。

おそらく、パブロ・ピカソは新しいアイデアが怒涛のごとく溢れ、それを試さずにはいられないのではないか。即ち、破壊＝溢れるアイデアで創作が止まらない状態だったのではないか。

ピカソもまた、激動の時代を自身の手中にし、その生々しい実体をカタチとして捉えようと突き進んだのである。岡本太郎がパブロ・ピカソに挑戦するというテーマを掲げたのは、豊かな美的才能や特殊技能と言う範疇ではない、魂から推し動かされる芸術感が符合したからに違いない。



## 脈動する芸術

一方、自分が何者なのか、そして何処へ向かうのかという存在そのものへの疑問から始まり、自身を取り巻く世界の社会的現実鋭い目を向け、そこから感じる矛盾、疑念、恐怖をありのまま作品に還元するカルロ・パルラーティ。その理念にも岡本太郎やパブロ・ピカソの哲学が通じるように思われる。ありのまま感じ取った実態をカタチにした作品が、彼らの創作に多く見受けられ、全身全霊で芸術に向きあう思いが伝わってくるのである。

立場の違いはあったが、彼らは共に戦争を経験し、大きく時代が変化し、自身の人生観を俯瞰すれば、変わりゆく世の中の表情を肌で感じずにはいられず、「自分とは」と言う最も原始的でいて素直とも言える創作(人生)概念が生まれたのかもしれない。

彼らが遺した芸術は、あたかもシンクロするようにその時々を感じ取った生々しい実体、創作への覚悟、それらが直接的に肌を通して訴えてくるのである。彼らの作品は、静かに佇んでいても確かに生命を帯びた「脈動する芸術」なのである。

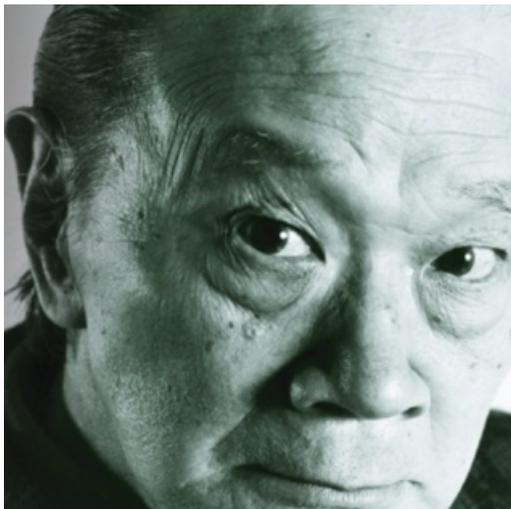


### カルロ・パルラーティ

1934 ~ 2003 年

学生時代から彼は、社会動向・思想・宗教など人間の内面や感情を自分の作品に反映させることに、心を砕くのである。

世界情勢がめまぐるしく変化した激動の1950~60年代の作品には、時代の空気を自らの魂に写し取ったかのような激しく、圧倒されるような作風となる。1970年代中頃になると、自身の哲学をより多くの人たちに、素直に伝えるには、…と考えるようになり、自身の作品を、見る人の、手にする人の魂に浸透させること、その考えから、カメオに自身の物語を刻み込むことで新たな方向性を見出すようになるのである。晩年、1995年、カルロはバチカン市国にてヨハネ・パウロ2世への謁見の栄を得て、イタリア芸術への偉大なる貢献、そして世界的な活躍を称えられました。



### 岡本 太郎

1911 ~ 1996 年

日本の芸術家。1930年(昭和5年)から1940年(昭和15年)までフランスで過ごす。抽象美術運動やシュルレアリスム運動とも接触した。第二次世界大戦後、日本で積極的に絵画・立体作品を制作するかたわら、縄文土器論や沖縄文化論を発表するなど文筆活動も行い、雑誌やテレビなどのメディアにも1950年代から積極的に出演した。

1970年(昭和45年)に大阪で万国博覧会が開催されることが決まり、岡本はテーマ展示のプロデューサーに就任。「とにかくべらぼうなものを作ってやる」と構想を練り、出来上がったのが『太陽の塔』であった。『太陽の塔』の永久保存が決定。現在も大阪のシンボルとして愛されている。

他、渋谷駅に設置された壁画「明日の神話」などが代表的な作品。



### パブロ・ピカソ

1881 ~ 1973 年

スペインのマラガに生まれ、フランスで制作活動をした画家、素描家、彫刻家。キュビズムの創始者として知られ、生涯におよそ1万3500点の油絵と素描、10万点の版画、3万4000点の挿絵、300点の彫刻と陶器を制作し、最も多作な芸術家であると『ギネスブック』に記されている。ピカソは作風がめまぐるしく変化した画家として有名であり、それぞれの時期が「○○の時代」と呼ばれている。

スペイン内戦中の1937年、バスク地方の小都市ゲルニカがドイツ空軍遠征隊「コンドル軍団」に空爆され、多くの死傷者を出した。この事件をモチーフに、ピカソは有名な『ゲルニカ』を制作した。死んだ子を抱いて泣き叫ぶ母親、天に救いを求める人、狂ったように嘶く馬などが強い印象を与えるモノトーンの大作であり、同年のパリ万国博覧会のスペイン館で公開された。



## Carlo Parlati Firm Collection

パブロ・ピカソ、岡本太郎、カルロ・パルラーティ、若干の前後はあるが激動の時代を体験した芸術家たち…、まるで互いがシンクロナイズしたような創作哲学の共通点には、己の生き様と言うか、その時々、心臓の拍動や脈動まで伝わってくるが如く、それぞれの作品に彼らの体温が詠み取れるような錯覚さえ感じる。

そんな一人、カルロ・パルラーティが自身の哲学的にも、創作への情熱にも、最も完成された時期の作品が「Firm Collection」として遺されているのである。

円熟期のカルロ作品は、歴史的、芸術的価値は勿論だけれども、見るものに訴えかける魂のような熱を感じるのである。これこそがカルロ・パルラーティ芸術の最大の魅力なのである。

これは限られた数の、選ばれしカルロ・パルラーティの作品である。

弊社は、故カルロ・パルラーティ 作品についてパルラーティファミリーの了承のもと日本国内で商標権を取得(2005年8月)して販売をしておりますが、故人(2003年11月16日)の没後15年が経過して遺された作品は数量が限定的であります。当初は200点以上弊社の在庫としてあった遺作が現在、30数点(カメオ・絵画・ブロンズ・彫刻など)になっております。大切に遺されたベストコレクション、特に優秀作品を門外不出(ファームコレクション)として取り扱ってまいりました。本物の価値を理解していただける方へ、ダイレクトに感謝を込めて開催いたしております。是非、この機会にご用命ください。



PARLATI

CARLO PARLATI©  
PITTORE - SCULTORE



**pulsation**



青年期のカルロ・パルラーティ

## Carlo Parlati

カルロ・パルラーティはイタリアの太陽と青い海に抱かれたトレ・デル・グレコにて1934年に生まれる。彼の芸術的才能はナポリ芸術学院に入学するも、その独自の創造力や求道心とも呼べる探求心が学習環境に飽き足りるはずもなかった。

人生に真摯に向き合うカルロはやがて自身を取り巻く世界の社会現実、そしてとりもなおさず人間そのものの内面により鋭い観察の目を向け、感じ取るものをダイレクトに表現していくのである。



現在のトレ・デル・グレコ



1950年頃のトレ・デル・グレコ市街



カルロが青年期を過ごした頃のトレ・デル・グレコ



1950年頃のトレ・デル・グレコとベスピオ火山

Io sono Dio, ma posso essere nell' uomo.  
Io sono l' uomo, ma posso essere in Dio.

このカルロが遺した言葉をどのように解釈し受け止めるかは、カルロの作品のとらえ方によって違ってくると言えるのかもしれませんが。しかし一歩まちがうと、神への冒とくとも受けとられかねない、ごう慢な響きすら感じられ誤解を招きかねない言葉とも言えます。

しかし晩年カルロ・パルラーティは、1995年12月10日ローマ法王(故ヨハネ・パウロ2世)との謁見を果たしています。場所はバチカンのサン・ピエトロ大聖堂でした。それは、名実共に芸術家としてイタリアの頂点に到達した証しとなったのです。



**「我は神なり、また神は我なり」**—カルロの作品のなかにある広大無辺な宇宙に遍満する世界観には神と人間への深い思索があります。そして人間の未来への大いなる可能性を訴えているのです。



功績が認められ、カルロ・パルラーティは通りの名称にもなっている



トレ・デル・グレコの誇りでもあるカルロ・パルラーティの墓標